

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## 果てしない雑草との戦い

雑草はたくましい。いくら草刈をしてもすぐに生えてくる。むかし、カマ。今は、草刈り機。田舎に親を残し街に出た同級生と出会うたびに話題になるのが草刈りである。夏場になれば毎週のように車を走らせ田舎の雑草を刈りに行かなければならない。いくら刈り取ってもすぐに生え、まるで終わりのないイタチゴッコのような作業である。この作業の空しさは、草を刈り取っても一銭の金にもならぬどころか、草刈機とその燃料代、非常に消耗する体力など考え出したらバカバカしさだけが残る途方もない仕事であることだ。

むかしは、草は牛に食わせる必要な飼料であった。毎日毎日、朝早くから大きな籠を背負い草刈に出かけたものだ。牛を飼う農家の日課であり、新鮮な草は牛たちにとって何よりのご馳走であったのである。その時代は、草を求めて山奥までも行った。

牛を飼わなくなって久しいが、草だけは昔のまま生き残って生え続けている。誰も草を求めて刈りに行く者はいない。雑草を刈らずに放置していると、たちまちにして自然に帰ってしまう。草の中から木が生え雑木林に様変わりしてしまうのだ。そうすると木の根が石垣や建物の隙間に分け入って壊してしまう結果となる。雑草とは怖ろしい破壊力を持っている。そんな事を知っているから、草刈だけはどうしてもしなければならない。

どれほど地球環境が悪くても、人間さえいなければ2万年で元の美しい自然を持った地球になると聞いた。その戦いの最前線が草刈かもしれない。皮肉にも草刈が環境破壊の一翼を担いでいると考えたらやるせないが、田舎の放棄された廃屋が年々雑木や雑草によって朽ち果ていき、やがて木々の間に吸い込まれていくように見えなくなる。人の創った物のはかなさ弱さを見せつけられる思いがする。

草刈に疲れた同級生たちは、次から次へと耐えられなくなって草刈をやめてしまう。一番の契機は親の死だ。親が亡くなり、四、五年もすれば無人になった空き家の周りの草刈をする動機を失い草ぼうぼうの廃屋になってしまう。

田舎で暮らすことは草刈を続けることである。草との戦いは果てしないが、草刈をやめたら生きてゆけない。何ともやるせない、波ぎわで砂遊びをしていて、苦勞して創ったモノが波に洗われ元の浜辺になるように、自然にあがなう術はないように思える。

しかし、理屈を言っても始まらない。とにかく生い茂った草を刈り取らなければならぬのだ。(嘉)

## 同性愛(2)

二十一世紀に入って、各国で同性婚の法制化が進んでいる。二〇〇〇年のオランダをはじめ、いまや二十数カ国におよぶ。今年に入って、保守の傾向のつよいフランスでも法案が成立、発効しているし、イギリスでは七月に法案が成立している。アメリカにおいては州単位で法制化が進んでいるが、六月に連邦裁判所が同性婚は合憲であるという判決をくださったので、さらに法制化は拡大するだろう。

同性婚は従来の婚姻と同様に、税の控除や相続権、社会保障などの優遇が得られるのだ。

ドイツのように、パートナーシップ制度を採用している国もある。パートナーシップ制度とは、同性カップルが登録対象で、保証は既存の婚姻とほとんど変わらない。

同性婚の法制化が進むいっぽうで、それに反対する勢力が根強く存在する。フランスでは法案成立前に、同性婚反対の大規模なデモがおき、警察と衝突して一〇〇人も逮捕者がでている。

キリスト教社会では、同性愛は罪悪として嫌悪されてきた。イスラム社会では同性愛の存在そのものを容認しない。サウジアラビアでは同性愛者は死刑である。

日本で同性婚は可能だろうか。★

それでも生きる

「では今年は何年」「二〇一三年」  
「二〇一三年から一九二六年を引いたら八七でしょうが」と別の人がいう。

「しつかりしてよ、テルちゃん」  
そうだ、私は、小学校の時、テルちゃんとよばれていたのだ。

なつかしいような、情けないようなテルちゃん。テルちゃんと呼んでくれた友達はみんなと違っていい程、あの世へ。

「ふーん そう」孫たちにとっては、バアさんの年など、どうということはないのだ。

自分にとつても、九〇近くになつたといつても、そんなことどうでもいい。考えたところでどうにもならない。

「あの時代、楽しかったわ。思う存分遊んだ！」といつている人がいた。それでいい。

この世に生を受けたからには、何があろうと生き抜くのは当然。人間は生き抜かずにいられないように出来ているのだから。楽しかった、苦しかった、それでも本能に従って一生懸命に生きた。

我が人生、総まとめで考えてもわからない。

愚痴、というものは梅雨どきの雨だれのように、じとじとぼとぼと、くり返ししゃべることに意味があるものとわかつていても…。  
結論は出せない。しみじみ思う。この世には、いろいろな人間がいて、それぞれに生きているのだ。

これでいいの

長い時間、腰をかけていた後で立ち上がる時、腰は曲がってすぐには伸びないし、歩けない。

「ヨッコラショ」二、三回の気合でやつと腰が伸びて歩けるということ。

だが、実をいうと、寝ていても感じるようになったこと、心臓が踊り始めることが再三。

ついにやって来たか、もう、さらばじや、と思ひ立つ。枕元の薬箱に手が伸びている。

「どこが悪いの？」。人のことなんかあまり気にとめたことのない妹。久しぶりに出会ったのだから、しゃべりまくると想像してたらしい。

異様に感じたのかも知れない。べつに…、心は鎮まってシーンとしているが。

おたがいに、この年まで生きてきたという感慨が先走りしてしまう。耳は遠くどこをうろついているのか、独り言のよう聞こえる。老いるということ、こくなつていくことなのだ、自分にいい

聞かせる。

「旅行でも近くでいいからゆこう」という。晴れても、曇つて変わらぬ風景に見とれて返事もまだら。「それで、どうする」「何の話よ」「けどねえ」と私は言った。

「私も年が年だからねえ、見た目は元氣そうだけど、道中が心配で」

「それは、おたがいさまよ、姉ちゃん、そんな弱気なことおわんといつて、たのむよ」

「いやほんと。そんじや、またね。帰るわ」

この世には、いろいろな人間がいて、それぞれに自分の色に染めて生きているのだ。

八十八歳のオット、満で八十六歳か、私の感情の動きか…。

これから「これから

今日は墓参り、気温は38度とかいって行くけど、行動にうつす。

いま、私の目の前にいる人は、全く存じません。ヒョコと笑つて「おばあちゃん、この暑いのに、どこへゆかれ

るか知らんけど、やめときなはれ」

「アア、いえ、ご親切に」。本当は、笑つて答えるべきだが、まだそこまでの余裕がなかった。口の中は、イタイ程乾いているし、足の震えも止まらない。それでも何とか、ブツブツ、何と間の抜けた声だろう、われながら情けない。

からかわれた、イヤ違う、親切心だろう。あの人の口調には他人をからかう緩みも、毒々しさも含まれていなかったもの。

やたらと警戒し、力んだ自分が恥かしい。人生いろイロ。

俳句

土田 裕

風得ては狭庭に揺るる百日紅

父母の眠るふるさと鱗雲

全長の銀にかがやく初秋刀魚

みちのくの辛き地酒や野分後

秋彼岸亡父の齡とうに越へ

おしゃれな  
デザイン

男性のシャツ  
ゆかた、藍布から  
アロハシャツ

着物から洋服を作り  
ます  
梵～ぼん～

## ステロイド剤の恐怖2

梵店主

ステロイドを60ミリ飲みだすと重病

人のようになった。薬の副作用か本来の筋炎の症状かは定かでないが、足腰の筋肉が一層弱っていく感じで、どうにかトイレまで行けたが、ふらついて雲の上を歩いていくようだった。便器に腰かけても、太腿の筋肉が細っているために、痛くなりそうで長く腰かけていられなかった。

精神的な躁鬱も辛い。鬱とハイな気分が波のように襲ってきた。人と話をして

いる時には、調子に乗って言わなくてもいい事をしゃべりすぎるので、後で後悔することが多かった。また、気にせずともいい事を、深刻に考え落ち込む、といったことを繰り返すのである。

身体も火照りと寒気が交互にきて、火照りで汗をかくと、次の瞬間には汗が凍って針のように肌を刺すように感じるから、幾度も着替えしないとベッドに寝ることも出来なかった。そんな状態であったから、一日中、着替えばかりをしていた。幸い洗濯機や乾燥機が病棟にあつて、自分で出来たからよかつた。

呂や毎日のシャワーなど何かと便宜をはかってくれた。

顔もアンパンマンのように丸くはれてきた。ムーンフェイスという症状である。目も充血してくる。胸筋や腕にも斑点が出てくる。よっちゃんは、もう立派な重症患者になってしまった。

週に二度、火曜日と金曜日に採血して薬の効果を見るのである。火曜日は看護師が朝六時ごろに来て採血する。金曜日は、担当の研修医が採血する。この採血は、採血する方も、される方も神経を使う作業なのである。特に、よっちゃんの血管は、黒ずんでいて注射針が血管に刺さりにくいのである。毎回、一度ではうまくいかず、二

三回刺してやっと血管に当たる、という有り様だったのである。もちろん慣れた看護師だと、あつという間に、ほとんど痛みもなく終るのであるが、慣れてない看護師や研修医の時は、覚悟がいった。

研修医もそのへんの事情がわかつていたので、「下村さん、採血させて下さい。上手く出来るか自信がありませんが、よろしくお願いします」と極めて低姿勢になっている。大病院の研修医たちは、概ね謙虚で丁寧で極めて良心的であった。

よっちゃんが、これまで診察を受けたどの病院の医師よりも、献身的で正直であった。少しの病状の変化にもすぐ対応してくれたし、自分の事のように心配してくれたよっちゃんの、病状のパロメーターであ

るCKの数値がなかなか下がらず、教授による医局のカンファレンス(病状検討会)で、25名の医師たちの大半が、免疫抑制剤を使うべきだと言ったが、よっ

ちゃんの担当医たちは、教授たちに対して、もう一週間様子を見させてください、とねばってくれた。そして一週間後、見事、よっちゃんの数値は期待通りの数値になったのである。その時に、研修医たちが自分の事のように喜んでくれた。

ステロイド剤の一番の副作用である血糖値の上昇の時も、不思議なことに、検査の時にはギリギリの数値まで下がったのである。この検査は、一日に7回針を指に刺しておこなう。糖尿病患者は入院中毎日おこなう検査でもある。

医師たちが最も怖れたのは、よっちゃんが、間質性肺炎の疑いがあることであった。この病気は急性である場合、余命は一ヶ月ぐらいで極めて重度の高い治療が難しい病気なのである。CTやMRなどを幾度も使い検査するも、進展状況がつかめない。急性なのか慢性なのか、判らないのである。

医師の聴診器を借りて、胸にあてて聞くと確かにケンケンという音が聞こえた。この音こそ、間質性肺炎の症状であった。この病気も難病指定を受けている難儀な病である。



## 連載◆おつちよこちヨイぼけ5

## 激落ちクンと私は真夏の深夜に…

とうとう彼が家に来ることになった。これ以上は、ノーと言うわけにはいかなかったのだ。しかも、ひと月あまり前に「どうしてもというなら、この日に」と言ったのは私なのだ。ひと月あれば、何とかなる。そのときは楽観的にそう思っていた。

実際は、何の準備もできぬまま、約束の日の前日になった。「逃げようか」と考えた。方法はある。「急に都合が…」と電話をかけて断りを入れる。あるいは、すつぽかす。約束の時間にピンポンが鳴っても、出ないのだ。息を殺して。クーラーを消せば部屋の外にある電気メーターも動かない。三回、四回とピンポンは鳴るだろう。「ちっ！」という舌打ちが聞こえても死んだふりをし続ける。それに、この猛暑だ。クーラーを消して死んだふりをしていたら、そのまま熱中症で死ぬかもしれない。私は、永遠に彼を家に入れずに死ぬのだ。それもいい…と思いかけたが、さすがに「人間として、それはちよつと」となげなしの理性が働いて、私はよつとこさ、重い腰を上げた。いまさらどうなるものでもないが、やるだけのことはやろう。夜の二時間ドラマを見ていたから、十一時をま

わっている。せめて九時からやればよかつたと思うが、後の祭りだ。どうせ私の人生、いつだって後の祭りなのだ。

見よ、このキッチンの壁。換気扇。レンジ台。床に積み上げた、わけのわからん「いるかもしれないが、ほとんどは使い物にならないガラクタ。しかし、捨てるのはもったいないような気がするアレコレ」。すべて、後の祭り人生の産物だ。「後で整理しよう」「後で片付けよう」。後で、あとで、アトで……。しかし、とうとう後がなくなった。

このとき、私は見てはいけないモノを見てしまった。かつて、お気に入りだったグラスやボトルの数々。使わずに飾っているうちにアブラだの何だのでべっとり汚れている。洗わなければ！ それらは食器用洗剤で面白いようにきれいになり、見とれるぐらいいなった。しかし、見とれながら気がついた。「こういうことをしている場合はなかった！」

「小」をこちよこちよいじつたところで大局は変わらない。「大」を制さなければいけない。限りある時間なのだ。

私は壁に取りかかった。どういふものか私は無精者のくせに、いや、無精者だからか、洗剤の類を買うのが大好きだ。一時期は深夜にやっているTV通販（昼間もやっているんだらうけど、

さすがに見ない）の洗剤がたまらなく欲しかった。「ああ、これさえあれば家中、ピカピカ」という妄想に囚われ、何回か買った。本当は、小さいのを一個欲しいだけなのだが、そこは通販。

しかも、外国モノ（多分）だから、ワンプートルがデカイ。どんな広い家を掃除するねん、というサイズのも物が送られてくる。しかし、TVでジェームスだかエレンだかが、「ワオ！すごいわ、信じられないア！」と叫ぶほどには汚れは落ちず、臭いもきつかったりして、通販洗剤熱が冷めた。それらのほとんどは、まだ家のどこかにあるので、うそだと思おう人は見にきてほしい。

本当に、落ちないから。本当に、臭いキツイから。ワンプートルがデカイから（家が片付かない理由が一瞬、わかつたような気がしたが。いやいや今は、ほかのことを考えてはいけない。目の前の壁だ、その前に洗剤の話だった）。

通販洗剤に見切りをつけた私は、スーパーの「新製品お試し価格」などに宗旨を変え、今回も買っておいだ。「キッチン用パワフル油落とし洗剤激落ちピカピカ！」。

家にあるんですけどね、洗剤各種。しかし、新勢力に期待するのは、人の世の常だ。私はレンジの上の最も汚れているあたりにシューしてみた。そして、叫んだ。「ワオ！すごいわ、この洗

剤！ 見る間に汚れが落ちていくわ！」もちろん、エレンの口マネだ。

エレンではない大阪人の私の本当の声はこうだ。「いや、買うといてよかつたわ、これ！ よう落ちるわ、うそみたいや。四九八円で、ちよつと高いか思うたけど、その値打ちあるデ、これ！」。シューしては、冬のパジャマを切ったボロぎれで拭く。シューするたびに、茶色のしずくが流れるところが、まさに通販洗剤CMの世界。その茶色のしずくと残った泡を拭きとれば、もとの淡いピンク色の壁が出てくる。「いい色のタイルだったんやね」と壁と激落ちクンを褒める。

そのまま一気に作業を進める人間だったらよかつたのだが、私は探究心が強いというか、バカというか、「他の洗剤でも、こんなにスつと落ちるんやろか」と考えてしまった。ごそごそと、使いかけの洗剤を並べて、試してみた。「家中おそうじこれ一本 ウタマロクリーナー」。洗浄力が弱い。油污れ対応ではないから仕方がないが、これで磨いていたら、朝までかかっても、すつきりしなかつたと判明。王道、「しつこい油污れにマジックリン」。落ちるけど、ボロ切れに付けてこすらないといけないから、こちの体力がもたなかつたと判明。「激泡キッチンクリーナー」。スプレー缶の下の方が錆びてしまっている。一体、い

つ買ったものやる。まあ、これも落ちるけど、激落ちクンの比ではない。「環境洗剤 シンプルグリーン」。メイドインUSA。かつて通販で売っていたものだが、私は東急ハンズで買った（掃除は嫌いでも洗剤を買うのは好き）。洗浄力において激落ちクンに完全に負けている。国粋主義者の安倍総理に電話で教えてやりたいぐらい、日本の激落ち、勝利！ おつと、アルカリ電解水「水の激落ちくん」だ。お試し価格で買ったものが、少しだけ残っていた。

キッチン用は新製品だから、「水のくんはお兄ちゃんにあたる。ここは油污れ対決だから、当然、弟の勝ち。そうか、そうか、と私は納得する。

そんな対決を、夜中にするか？ と人は思ふかもしれないが、私には時間がない。うっかり買った新製品より、いいものを私が持っていたなら、そっちを使って、時間短縮を図らなければならぬ。というのは、うそ。本当は、どれぐらい、この弟「激落ち」がスゴイか、試したくて試したくて。人情というものだ。わかかってほしい。弟「激落ち」のお陰で壁は何とか。

いよいよ、本命のレンジ。魚焼きグリルを取りだして、卒倒しそうになつた。何年前かに壊れてしまつて使つていなかった。当然、きれいなはずなのに、何、コレ？ なんて、こんなにべ

トベトギタギタ？ しかも、そのうえに野菜のくず（かつて）ごときものがべつちよりとほりついている。野菜いためなんかして、フライパンから飛び出したモノがどういいうルートをとったか、グリルに入り込み、「使つてないもんね」と洗いもしなかったから、えげつないことに。泣きながら洗った。こんなところに伏兵がひそんでいようとは。

諦め、疲れた私は、魚焼きグリルを乾かしたところで寝てしまった。

「成り行きに任せよう」。そして、彼はやってきた。「大阪ガスです。点検させていただきます」。滞在時間五分つてとこだったでしょうか。「炎は青いですね、大丈夫です」。そう言い残して、彼は去った。壁、見てくれましたか？「激落ち」クンなんですよ、と言いたかったが、関わりになるのを恐れるように、彼は去った。点検の人が帰ってから、ふと鏡を見たら、エプロンのひもが肩のところですねじれて、あさつての方向に飛び出していた。見ようによつたら、頭のネジが一本切れている人かな？と思える不可思議なエプロンの着用っぷり。深夜に何時間もかけて壁を磨くより、直前に一秒、鏡を見た方がよっぽどよかったのだが、これも後の祭り。

(AO)



### お前はすむにタコになつてゐる...

大江雉兎

蝸壺や

はかなき夢を夏の月 芭蕉

夏の終わりにあたつて、この一句を出してみる。芭蕉吟のなかでも有名な部類に入るので、聞き覚えのある方も多いに違いない。そんな句を、今回取り上げるのは、今年の夏は、おのずとこの句が頭を過ぎつてしまふ、そんな夏だったからである。

その心は、ということと本題に入るに先だつて、まずは吟の標準的な評釈をしておこう。貞享四年の冬、江戸を發つて関西方面への旅に出た芭蕉は、翌年の四月（旧暦なので季節は夏）には須磨にいた。古くよりの歌枕、また月の名所として名高い須磨の浦だったが、芭蕉の感興を刺激するものは少なかったのか、「月はあれど留守のやうなり須磨の夏」月見ても物たらははずや須磨の夏」といった吟詠が残されている。そうこうするなか、芭蕉は源平合戦の古戦場、一ノ谷方面へも足を伸ばす。『笈の小文』に描かれたところによれば、足を滑らしそうになりながら険しい岩場をよじり、やつとこのことで鉄拐山（山陽須磨駅の西側にある標高二三四の山）の頂きに立つことができた、

とのこと。ハイキングルートなどなかった時代だった云々を含めたとしても、文言は誇張がすぎるようだ。しかし、現実がどうだったこうだったなど言わず、すべて空想の中の登攀だったと考えれば分からなくはない。『奥の細道』の旅でもたびたび行われている、目を瞑じてのイメージトリップである。義経や弁慶が疾駆した一ノ谷を眺めるには相応の難路であつて欲しいとの願望から広がった空想にもとづくものであれば、十分に筋は通つている。

そんな須磨滞在の段の最後に、「明石夜泊」と題した吟が添えられる。それが最初に挙げた「蝸壺やはかなき夢を夏の月」である。

短夜の月に照らされた蝸壺を眺めてのものだろう。芭蕉が実際に蝸壺を眺めたとすれば、それらは浜辺に並べられた状態である。しかし、空想は海底に沈められた蝸壺に、そしてそこを安住の隠れ家と思つてやつてきたタコどもに及んでいる。その姿は、この地が源平合戦の古戦場であるだけに、終わることのない栄華と夢想していた平家の姿とも重なる。福原で我が世の春を謳歌していた一門は、すでに捕らわれていることも知らずに蝸壺の中で安らかな夢を貪つているタコのようなだ……夏の月に照らし出された蝸壺を見て、芭蕉の思いは遙かに時を超え

たに違いない。

さて、例によつて前振りばかりが長くなつたが、この一句と今年の夏は見事に重なつてしまふというのが私の考えである。具体的には、このところ相次いでいる「バイテロ」のことである。生物兵器を用いたテロリズム、すなわちバイオテロをもじつての謂いなのだが、アルバイト従業員が勤務中の非常識行為を自らのツイッターで自慢げに語り、それが広められて企業に損害を与える事象のことである。アイスクリームの冷凍ケースに入つて寝そべつてみたり、ピザ生地を顔面に貼り付けてみたりと、やりたい放題の当人を馬鹿呼ばわりするのは簡単だろう。しかし馬鹿呼ばわりで終わらせるのでは、何の解決にもならない。そもそも何が問題なのかといふところから考える必要がある。中には、馬鹿は大昔からいたのだから、迷惑行為に対するペナルティを粛々と課せばいいだけだといふ意見もある。確かに騒ぎすぎる傾向がないでもない。馬鹿な行為をひけらかすことと、他人が行つた愚行に対して無責任な言動を吐き散らすこととは分けて考えた方がよさそう。前者に限れば営業妨害を訴えて法的な対処をするべきところだろうし、後者については馬鹿を馬鹿となじつたところでは何の意味もない。それ以前にツイッターやネット掲示板でその手の発言をすること自体が馬鹿の当事者と五十歩百歩であるとの見方もできる。

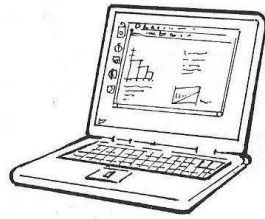
度の過ぎた誹謗や無責任な中傷なら、匿名のつもりでも発言者はすぐに特定されるからである。行為に責任を持たないのが馬鹿であるのなら、無責任な発言を行う者も馬鹿である。

ここで、面白いのが馬鹿をひけらかすのも、馬鹿をなじるのも、ツイッターやフェイスブックなどSNS（ソーシャルネットワークサービス）と呼ばれるシステムを介していることである。ひと昔であればネット掲示板が馬鹿自慢をめぐる主戦場だったのだが、最近ではSNSがその役割を担っているようだ。ただ、方法が変わったとはいえ、SNSもネット掲示板も、その気になれば発信者はすぐに特定される点は変わらない。

ここまで来れば蛸壺との共通点も見えてくるだろうか。武勇伝気取りで馬鹿をひけらかすにせよ、それを見つけて「祭り」とか「炎上」とか呼ばれる騒動を仕掛けるにせよ、その行為自体がすでに個人を特定する情報と結びついている。ハンドルネームを使って表面的に名前を伏せたところで実際には匿名でもなんでもない。いつ攻撃にさらされてもおかしくはないのである。そういう意味でいえば、SNSやネット掲示板を利用すること自体が、すでに蛸壺の中にあるようなものである。蛸壺の中でタコは身を隠したつもりにな

って楽しい夢を見ているのだろうかそれと同じように、馬鹿の武勇伝も祭りも炎上も当事者はそれが楽しいからやっているに違いない。だが、そうした行為を発信した時点で、すでに誰による仕業なのかというところまで確定されている。

最後に、こういうことも言い添えておかねばなるまい。今回のような文章を書いて他人様に読んでもらう形にする以上、文章を書いた私自身がすでに蛸壺に入っているのと同じである、と。もちろん、それだけの責任と覚悟は持っているつもりなのでバイトテロその他の行為とは一線を画してもらいたいのだが。



#### B級サラリーマン渡世譚 その4

### いよいよ輸出部生活がスタート3

明石 幸次郎

転勤の初日に上司になるA課長に挨拶を済ませたら、直ぐに担当する業務の説明があつて、与えられた席に戻り、とりあえず業務関連の資料に目を通すという運びになるものと予想してい

た。中々その予想通りの運びにならず、イラン、中近東、アフリカを担当しているKさんを紹介された。

「この度、こちらに転勤で来ました明石です」と挨拶すると、Kさんはチラッと私の顔を見て「おう」と言っただけで、英文のレターの原稿か何かを書いているようで、直ぐに目をレターのようなものに移し、書き続けていた。服装は糊の効いたピンクのカッターと一目でブランド物だと分かる派手なネクタイで決めて、そのまま男性ファッション雑誌にでも出てきそうなダンディな雰囲気とオーラを漂わせていた、工場では絶対に居そうにないタイプの社員であつた。この人とも会社のどこかで会つたような記憶があり、Kさんもそのような顔をしていた。同じ課のメンバーに違いないが、どうもこのKさんと一緒に仕事をするわけではなさそうで、自分からはそれ以上話しかけなかつた。

次に紹介してもらつたMさんとN君の二人がこれから一緒に仕事をするに分かつた。「おーい、M、N二人共、ちよつと来いや」とA課長は自席に二人を呼んで、「聞こえてたと思うが、今日からウチの課に来た、入社7年目の明石や。本社、工場で資材の経験はあるが、海外の営業は初めてや！ お前等、二人で良く相談して分担を決めて、早

く戦力になるよう、特にMは明石の指導をしてやってくれ。N、お前は、明石に貿易、コレポン、事務処理などの実務を教えてやってくれ」と、やつとこれから一緒に仕事をするMさんとN君を紹介してもらつた。Mさんは、69年入社の人塊世代で何処の部署に行つても同期の誰かが居ると言うような年代で、明石より5年上であつた。N君は逆に2年下の、76年入社で最初から海外要員として採用したO外大出のプリンスであつた。

「何か質問有るか？」というA課長に対し、N君は、「分担ですが、バンングラは、日本政府援助資金の大口入札案件の工作がこれからヤマ場なので、引き続き、私にやらせて下さい」とこの案件に強い思い入れがある様子で、この場で敢えて課長に念を押し、確認するN君の態度に明石は非常に好感を持った。

それに対し「分かつてるわ！ 引き続き、バンングラはお前とM社のKのコンビでやれ。どんな事があつてもライバルのY社に負けたらあかんぞ！ 負けたら二人共、首や！なあー。N！ お前からバンングラを取つたら何も残れへん事ぐらい分かつてる。まあ、後に残るのは、インド位やなあ。インドも一年ほど何の動きもないやないか？ N、何か仕掛けてんのか？お前、毎日、M社のKと電話ばかりして、他の仕事、何もやってないのと違うか？」「色々ケララアグロ社のM.E.モーリス

には、アプローチしていませんが。何せコマーションベースでは金がないので難しいです」とA課長の質問に対し説明をしたが、A課長も「アホか！そんなインドルが金のないことは誰でも分かっているわ。コマーションベース以外の政府援助資金で何か仕掛けを作らんかい？M社を使って現地で動け。席にすわって、電話ばかり掛とって、注文なんか取れるか！バングラとインドへ行つて来い。帰りにスリランカの公団に寄つて、注文貰つて来い！」

「そんな簡単に言わないで下さい。まあ、Aさんがそこまで言われるのであれば、来月に出張するように計画しますが、行き成りですね」と応えた。

明石はこのA課長とN君とのやり取りを聞いて、T畑さんがA課長への対応で「Aさんに何かと言われたら、ちよつとは言い返さないとアカンで」と助言してくれたのは、N君みたいな、やり取りのことを言うんだなあ、と思った。

A課長はN君と話しあいしても時間が掛かると思ったのか「M、明石の担当を決めたつてくれ。それと、お前、韓国のD社の鄭専務に大分嫌われてるぞ。何かあったんか？お前とはもう商売したくないので、担当を換えてくれとK部長とU工場長にまで電話で言つて来たぞ。丁度エエわ。韓国は明石にやらせや！お前はアセアンを専任でやれ。それと明石

とNの指導がお前の役割や！」とMさんに指示をした。お前等二人で決めと言いながら、具体的に分担をA課長が決めてしまいい、その上、皆の前でMさんに韓国の担当は明石に替われ、とまで指示した。指示された方のMさんは係長としての面子は丸つぶれになった。しかし、その場ではMさんは、韓国の担当を外されたことに関しては何も反論をしなかった。却つてホッとした表情になったのは、意外であった。その理由は、後でMさんと話をした時に分かった。

明石はやつと与えられた席にMさん、N君と戻り、Mさんがリードして、担当国の分担を明確にすることを話し合った。明石は、韓国、中国、ネパール、ブータン、ベトナム、ラオスとスリランカを担当し、N君はインド、パキスタン、バングラを受け持ち、Mさんは、アセアンを担当し、3人のグループの取り纏めの役割をすることに決めた。席は明石を挟んで、左にN君が座り、A課長に一番遠い右にMさんが座るようなポジションであった。明石にとつては、左右の両者から分らない事があれ

ば、直ぐに聞くことが出来るので便利なポジションであった。Mさんは分担を決めた後、明石に自分が韓国の担当を外された経緯を述べ始めた。最初から、ややこしそうな国を担当させられたと思ひながらも、Mさんの言い分に耳を傾けた。

とNの指導がお前の役割や！」とMさんに指示をした。お前等二人で決めと言いながら、具体的に分担をA課長が決めてしまいい、その上、皆の前でMさんに韓国の担当は明石に替われ、とまで指示した。指示された方のMさんは係長としての面子は丸つぶれになった。しかし、その場ではMさんは、韓国の担当を外されたことに関しては何も反論をしなかった。却つてホッとした表情になったのは、意外であった。その理由は、後でMさんと話をした時に分かった。

## 心は年をとらぬ

駒田明克

ておられます。

この言葉は、97歳の現役のフォトジャーナリスト笹本恒子さんのことばです。昨年の何月かは忘れましたが、テレビの「徹子の部屋」で黒柳徹子さんと笹本恒子さんの対談がありました。その中で、笹本さんが

その時さつそく手帳の余白にメモしておいた心にある言葉です。それまで笹本恒子さんについてはい、全く知りませんでした。その時紹介された著書「97歳の幸福論」を先日購入し読んでみました。

テレビで拝見した通りの美しい、オシャレな笹本さんのエッセイで、一気に一日半で読んでしまいました。

笹本恒子さんのプロフィールを紹介します。笹本さんは、大正3年(1914)東京に生まれ、1940年に財団法人写真真協会に入社、日本初の女性報道写真家となりました。97歳(たしか昨年9月で98歳になられたと思います。)の今もなお、全国各地で講演や写真展など現役として活躍し

ておられます。激動の昭和をカメラを通して見つめ続けてきた写真家人生とライフスタイルが多くの女性に支持されております。いや、われわれ男性からみても、すてきなおばあちゃんというより、大変魅力的なチャーミングな女性です。

この本のなかで、97歳の現役カメラマン・笹本恒子流「暮らしの極意」を紹介、：温かい家です、ちゃんと食べる、ちゃんと歩く、身だしなみに手を抜かない、年齢を悟られずに生きる、読む、書く、仕事&恋をする…。

冒頭に「バラ色の人生」をめざしてとあるように、ちよつとした工夫や努力や心持で、人生はバラ色に輝く。：を実感しておられる著者の「ひとり楽しんで暮らす、5つの秘訣」を披露しています。

秘訣1は「温かい」家でくらす。一時は老人ホームに入ろうかと考えたが、止めることにしたこと。今はマンシヨンの10階で生活し、手すりもつけていない。

夜10階の窓から夜景を見ながらいた

だ、一杯の赤ワインは最高とのこと。毎晩の習慣のようです。

### 秘訣2は

ちゃんと食べる、ちゃんと歩く。今でも、三食手作りを実践しておられます。また歩くことが大切な健康法の一つになっているようです。

### 秘訣3は

身だしなみに手を抜かない。おしやれは頭を使うだけ、お金をあまりかけずに、頭を使うとみんなの違う服を着れるそうです。

### 秘訣4は

年齢を悟られずにいきる。「ずっと年下の友人とも、同じ年のつもりで付き合う。」これはなかなか難しいかも。

### 秘訣5は

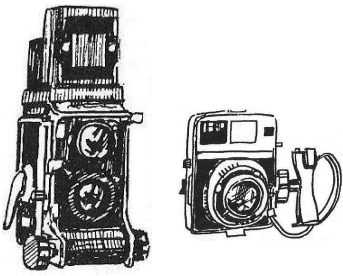
読む・書く・仕事&恋をする！恋のお相手は韓流ドラマの主人公でもないようだ、いつまでも好奇心を失わないのも大切かもしれない。プロの写真家であるから当然「ライカ」のようなカメラが愛用機だが、デジカメデビューを楽しい想いに語っておられる。携帯電話もお持ちになっている。そして、これからやりたいことがまだまだたくさんあるとおっしゃる。

笹本さんは、「とにかく、日本人は自

分の年齢も、他人の年齢も気にしすぎです。そして、年齢で枠をはめ、行動を規制する。でも、それはもったいないと思いませんか？学ぶのにも、行動するにも、年齢は関係ありません。もういくつかわ、なんて考えたらおしまいです。

もちろん、わたしも毎年、年をとっていきます。でも、心は年をとっていないから、年中あれをしよう、これをしよう、と頭のなかはいっぱいで、ビジー、ビジー。」また、次のように書いておられます。「老前整理とか、終いじたくと言って、モノを処分してさっぱりと暮らすことが流行っているようですが、わたくしはそれはイヤなの。何しろ、人生バラ色主義ですから。モノって、元気をくれると思うし、それに流行を取り入れた服だって、まだ欲しいし、毎日をわくわく楽しく暮らすことを優先：」「みなさまに申しあげたいのは人生でもう遅いという年齢はない、ということですよ。」

なんて素敵な言葉でしょう。



★民法には、結婚は男と女がするものとはつきり書かれているわけではないらしいが、じつさいは同性婚の婚姻届は受けつけられない。

憲法ではどう規定しているかというところ、二十四条に「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本とし、相互の協力により、維持されなければならない」とあって、はつきりしない。「両性」は男と女と解釈するのか、男と男、女と女という同性も含むのか。

第二項に、配偶者の選択、財産権もろもろに関しては、「法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない」とある。「両性の本質的平等」というのは男と女をさしていると思われる。明治憲法下では女性の人が権が踏みにじられ、個人として尊重されなかったという反省から二十四条は成り立っているからだ。

憲法の本質である「個人の尊厳」という立場から見れば、同性婚も憲法は認められているとも読める。

同性愛という事象にたいして、現代の日本人である私たちはどのようなふるまうのだろう。ゲイの人たちの存在はだいたい認められるようになったが、それでも少なからずの日本人は、異常な性愛、変態性欲だ、あるいは少数の人が患う病理だという受けとめ方をしていると思

われる。

江戸時代以前にさかのぼると、日常生活における性愛の風景が一変する。男性という性の営みが女色と同じくらい濃さでたちあがってくるのである。明治に入っても男性の慣習は残っていて、鷗外の自伝的小説『牛タセクスアリス』に男性の受け身にされそうになったことが語られている。

男性は高野山と比叡山の僧の世界に芽生えるようである。世俗を離れ、男だけの世界で何年も厳しい修行生活を送る。そんな山の生活の中で、男同士（稚児と僧侶）の性愛が始まるのだ。

男性は僧の世界から戦国武将へ広がる。バテレンが、男同士の性愛の多さに驚いている。有名なカッパルは織田信長と森蘭丸である。やがて、一般の民衆にも広がっていく。

『葉隠』という武士の心得を説いた指南書に「忍ぶ恋」が語られる。念友といわれる男に注がれる愛情のことである。男に向かう献身的な無常の愛情である。

男同士の性愛とはいえ、鷗外のいう「受け身」になる男はほとんどが少年である。十代半ばくらいの少年といえば、男でもない女でもない、いわば中性的であり、男性は、ゲイの世界の性愛とは趣が異なる。

一度出家し、還俗した水上勉の男性と女色の経験を次回に語ることにしよう。